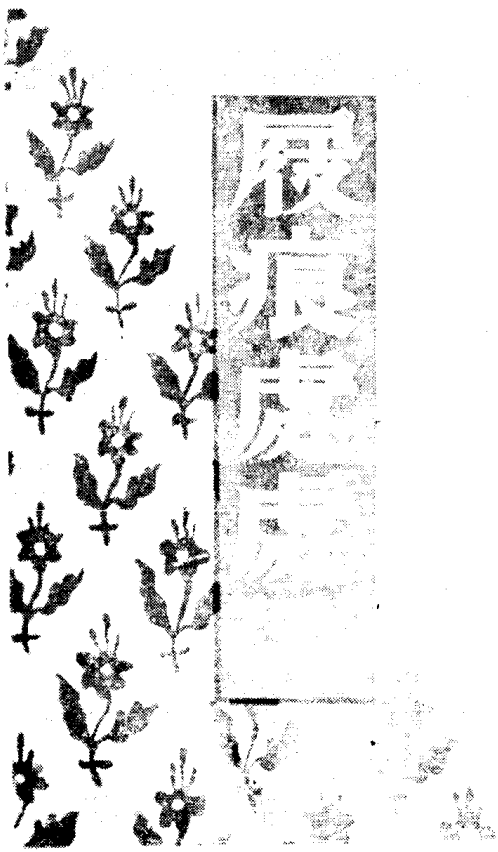
郁達夫文集

生活·讀書·新知

三聯書店分店

装帧设计　林　墉　刘世仁　尹　文
特约编辑　王自立　陈子善
责任编辑　邝雪林　潘耀明

都达夫文集
（国内版）
第三卷·散文
*
花　城　出　版　社
（广州大沙头四马路）
生活·读书·新知三联书店香港分店
（香港中环域多利皇后街九号）
联合编辑出版
广东省新华书店国内总发行
生活·读书·新知三联书店香港分店海外总发行
广东新华印刷厂印刷
850×1168毫米32开本 14印张 4插页 300,000字
1932年3月第1版 1982年3月第1次印刷
书号 10261·105　定价 1.50元



一九四六年六月铁流书店版《展眉处处》封面

郁达夫与其长兄曼陀、二兄养吾合影

仰望堂弘仙將
山灌陵如為有
明廣是人物同
前程驟一之樂
旗是馬周
林景先生
郁達夫
二九三二年十月

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目　录

盬原十日記 …… 1
归航 …… 14
还乡记 …… 22
立秋之夜 …… 45
诗人的末路 …… 47
还乡后记 …… 49
苏州烟雨记 …… 60
海上通信 …… 71
一封信 …… 78
零余者 …… 84
北国的微音 …… 91
读上海一百三十一号的《文学》而作 …… 96

给沫若 ……100
小春天气 ……107
给一位文学青年的公开状 ……116
骸骨迷恋者的独语 ……122
南行杂记 ……125
送仿吾的行 ……135
一个人在途上 ……139
打听诗人的消息 ……146
灯蛾埋葬之夜 ……150
故事 ……156
感伤的行旅 ……160
马蜂的毒刺 ……180
志摩在回忆里 ……183
沪战中的生活 ……189
钓台的春昼 ……196
光慈的晚年 ……204
移家琐记 ……209
半日的游程 ……214
暗夜 ……218
杂谈七月 ……220
杭州的八月 ……222
杭州小历纪程 ……224

浙东景物纪略 ……243
二十二年的旅行 ……258
临平登山记 ……262
婿乡年节 ……267
杭州 ……270
西游日录 ……276
出昱岭关记 ……294
游白岳齐云之记 ……299
屯溪夜泊记 ……308
北航短信 ……313
故都的秋 ……315
所谓自传也者 ……319
桐君山的再到 ……322
南游日记 ……326
雁荡山的秋月 ……338
青岛、济南、北平、北戴河的巡游 ……347
悲剧的出生（自传之一） ……352
祝赵母王太夫人的寿 ……358
我的梦，我的青春!（自传之二） ……362
两浙漫游后记 ……368
书塾与学堂（自传之三） ……372
水样的春愁（自传之四） ……377

超山的梅花 ……384
雕刻家刘开渠 ……389
寂寞的春朝 ……393
追怀洪雪帆先生 ……395
远一程，再远一程！（自传之五） ……400
春愁 ……405
孤独者（自传之六） ……407
惜掌之歌 ……413
花坞 ……417
皋亭山 ……421
龙门山路 ……426
大风圈外（自传之七） ……433

鹽原十日記

首夏猶清和なり，人人は何が故に，山や海に行くのか，と不審に思った初夏も打過ぎて曇(どん)よりした日は，幾日も續いた。土用に入っても永引いた梅子黄時の雨の爲め，熱い日は一日もなかった。此の位の事なれば，何も避暑する必要がない，と獨りで喜んで居ると，立秋後の二三日間に，突然九十三度の高温度がやって來た。

叢竹幽蘭葉盡焦　秋來轉覺暑難消　賣冰簾下紅裙影　映得斜陽似火燒　法外に秋來の暑熱を誇張したのは，自然に對する不平を鳴らしたに過ぎぬ。古來の詩人が消夏雜詠とか消暑詞とか云ふが如き詩詞の中に，大抵直接に天候の暑熱を詠せずして，却てかくかく取り濟まして居る故，盛暑中と雖も更に熱しとも思はざる，その虚偽な態度に對して，予は小供らしくも，反抗的な氣分になって居たのである。

愈々都會の炎熱に堪へかねて，鹽原へ逃げて行かうと思ひ

立ったのは，八月の十日であった。翌十一日の午後，蟬時雨を潜って，予は山陰道上にでも來たかと郊野の風光に神を奪なれつつ，鹽谷の高原を自働車で駈け上がったのである。

緑樹參差墜影長　野田初放稻花香　何人解得山居樂　六月清齋午夢凉　と口號みて，三五日の前，詩人の矯飾なりとて，腹立たしく思った，その濟ました態度を，今は予も取らんとする事に氣が付くと，一人でに微笑んで來る。

鹽溪の勝は，奥蘭田に紹介せられたるものと聞く。孤陋寡聞予の如き，固より奥蘭田の著述に接する筈がなかったのであるが，偶々同乘者に一老人ありて，詳細に鹽溪の由來を説いてくれた。百聞一見に如かず，今鹽溪道上に在りて，鹽溪の説明を聞くのは，云ふ迄もなく，鹽溪を知るに絶好の機位である。その老人の話に釣り込まれて，予は遂々溪山の風景に敬意を表する事を忘れた。山靈水伯に對しても申譯がない次第である。

夕陽が傾いて，高い山の影が谷底に射し掛る頃，紆曲りに蜿った自働車は，福渡温泉の泉屋に到着した。華堂綺帳三千户，大道青樓十二重の此の宿場には，貧賤を以て人に驕らんとする，予が如き窮措大を，容るる雅量もあるまいと思って，予は更に山の奥へと自働車を走らせた。あの「掌故羅胸」の老人とは，泉屋の玄關で別れた。因みに云ふ，文章華國，貧賤驕人とは，予と兄曼陀との合作で，五年前の元日に，門の扉に貼った「春聯」である。

行行重行行，安心して宿を取ったのは，古町の，如何にも古びれたが，しかし輪郭の整うた，中會津屋と云ふ旅館であった。此旅籠屋の前は，長安の古道にも喻ふべき會津街道を控

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

へ，後は永樂と云ふ，小さけれど風趣に富む花園のある，小高い山に接して居る。山の名は知らぬとも，予は勝手に花園山と名付けてやった。着物を着換へて，暫らく休んだ後，風呂場に案内された。玲瓏透徹な此の旅館の御湯は，殊の外に肌觸りがいい。目を潰って，微温透明な温泉湯に浸って居ると，白樂天の長恨歌が思ひ出された。……温泉水滑洗凝脂……なる程うまい，風光細膩とは此の種の詩句を云ふのであうう。……侍兒扶起嬌無力。始是新承恩澤時……此の句に想到して，予は唐の檢査官の度量の寛宏なるのに感心せざるを得なかった。今の日本ならば，○○でも打たせらるるか，發賣禁止でも喰ひそうな處である。芙蓉帳暖度春宵の一句丈けでも優に今の風俗壞亂罪を構成するに足るのに，況んや白晝宣淫のあの活潑潑地の描寫に於てをやである。異想天開，空想を逞うして居ると「今日は」と挨拶されて，軟かな，嫋やかな足音が近づいて來た。目を開けて見ると，孫子瀟の詩その儘である。

鸚鵡當窗不敢呼　玉釣響處捲簾無　風前冉冉輕雲影　一幅楊妃出浴圖　兩語三言挨拶した後，彼の女は予と同時に御湯から上がった。そこで天真閣の消夏詞が又た一首見せ付けられた。

細喘嬌吁出浴初　雲鬟依舊似新梳　香融粉汗羅巾拭　越顯肌膚雪不如　黄昏がれてくると，周圍の山影が菱菱と迫まって來る樣で怖かった。日記に二三の詩を書き付けて，夜は早く横になった。

去年閨裏拜黄姑　今夕山中伴野鶴　牛女有情應憶我　秋來瘦盡沈郎軀

碧落蒼茫望若何　漫將恩怨訴星河　與君緣是前生定　惜別情應此夜多　且對紅塵思浩刼　須知滄海足微波　高樓莫憶年時夢　好事如花總有磨

蓋し閨中の兒女に送る詩である。以下は日記をその儘寫す事にしよう。漢文で認めたものも有れば，和文で書きなぐったものも有る。

十二日晴。夜凉人夢秋、予友某氏句也。睡重衾中、正作此想、忽聞檐外、雀聲喧如雨下、予乃起床。梳洗畢、旅舍主人以筆墨紙來乞書、笑却之。主人以爲國人皆善書、殊不知予乃長於此邦者、言書固與主人無異也。主人乞不已、勉書一絶以應之。

豆架瓜棚許子村　溪聲山色謝公墩　客中無限瀟湘意　半化煙痕半水痕。

第三句本欲改作客中無限思歸意。因已書就故、將錯就錯、亦不更爲之改。主人問詩意若何、予笑而不答。忽憶及史悟岡西青散記中所引湯某语、不覺驟然。湯某曰、人生須有兩副痛淚、一副哭文章不遇識者、一副哭從來淪落不遇佳人。

午後踏山路赴新湯。新湯與湯本爲鹽原最高處、人煙隔絶、固一仙境也。所可惜者、道路崎嶇、非脚健者不能往。東坡曰、二客不能從也、此處亦然。到新湯日已西仄、山風自緑樹中吹來、凉爽可人。浴於君島屋旅舘、又取酒食食之、山民之多食、予至此方解其意。

在君島屋浴後、即越富士山頂而赴大沼、路更嶮峻難行。至大沼口、見有懸掛七色紙條之竹竿若干横棄水邊、紙條上有天河七夕等字、知村童前夜來棄竹竿於此、蓋舊曆之七夕也。按唐時舊俗、七月七日、文人每立竹竿於門前懸詩詞於其上、以示才

藻、女子則倚高樓、陳七綵、於暗中穿鍼、謂之乞巧、實鬪巧耳、聞此習我國不行已久、不意於日本尚得見之、賦詩一絶、以紀其事。大沼在富士山峯下、相傳爲昔時噴火口、一池清水、凈寂不波、前黑山與富士山倒影其中、令人作世外之想。在大沼傍少息後、仍返原處、據高崗而望西北、頗北白雲親舍之思、時日已斜矣。成詩一首。

十五日晴。午前遊妙雲寺。寺係奉妙雲尼由京都搬來之釋迦佛者。金身釋迦佛一尊、來自中國、平家亡後、小松内府重盛之姉母妙雲尼與築後守貞能、負此像潛逃至此。妙雲尼歿後、貞能爲立院、名以尼名。禪尼墓今尚在寺後山中。境内多碑文、松平康國撰之鹽溪名勝碑、係記奥蘭田等之功德者、碑文不能記矣。

寺内多花草、寺後臨山、有飛瀑數尺、滴水滄浪、環繞庭中、水中遊鱗、一一可數。殿中陳列各人手蹟、供人觀賞。予於各種書畫中、僅取光明皇后天平十二年五月一日願經一道、末有楊守敬題跋、楊以此經爲漢人書。

十六日晴。少し退屈を感じ初めた。温泉の妙味は實に此の退屈感に在る。午前は小説を一册讀んだ，クヌト，ハムズンの「大地の生長」である。午後は朗かな日光を浴びて，鹽湯に行った。箇人まりな，氣持のいい温泉場である。湯に稍久く浸って居ると，幾人も幾人も若い女が入って來た，聞けば此處の御湯は婦人病に奇効ありと云ふ。詩を作った。少し輕薄の嫌ひは有るが，事實をその儘詠じた迄である。

十七日　微雨。午後遊源三窟、源三位賴政氏之孫有綱避世處也。洞内多鐘乳石、非匍匐不可行、不知有綱氏在日、此洞亦如此窄否。出源三窟、至八幡宮觀大杉、復渡溪而北拾化石二而歸。

十八日曇り　今日は舊の七月十五日に當る。午前は何だか少し天氣が怪しい，予の氣のもめ方も一通でなかった。

盆踊りの名は昔から聞いて居る。栃木と群馬地方に殊に盆踊りが盛である事を聞いて居る。幸ひ今日は舊の十五日に當って居るから雨に降られて，此邊に著名な，原始的で有って，而も優美絶倫な盆踊りを見損ってはと予は頻りに空模様を氣にし出した。

雨雲は幾重も幾重も山の懷に往來して居る。生氣のない，灰色の空も低く山の頂きに垂れ下がって居る。何となく氣の苦些苦些する日である。午後の三時頃驟雨が颯っと降って來た。稻妻も雷も伴って居る。夕立だ，今に晴れるだらう，と成るべく都合のいい樣に解釋して居る内に，夜陰が山の奥からこっそりと町全体を掩ひ盡して仕まった。電氣が付いても微雨がまだ止まない。今夜はもう駄目だらう。

諦めてやけ酒を飲んで居ると，此の近在で生れた大島君がやって來た。室に入るが早いか，すぐ

「おい君，今夜盆踊りがあるせ，案内してやらう。」

と頓狂な聲で叫んだ。二人が酒を飲んでる内に九時になった。大島君は催促した。

「そろそろ行かうぢやないか，もういい加減だ。」

二人は屋外に出た。雨はもう止んでる。どことなく薄明い夜である。雲の破目には淡青色の空すら覗かれた。五六町程西に行くと，どっとこどんどんどっとこどんどんと太鼓の音が黑闇に突き出て居る八幡宮の森から響いて來た。大島君は又叫

んだ。

「やっとる，やっとる！」

八幡宮は山の半腹にある。庭には逆杉と云って，鹽原の名所の一つとして算へられてる大杉が二本ある。太鼓や銅鑼や明笛や空樽は此の杉の下で鳴らされてるのだ。

庭に上がって見ると，一群の男女は環になって，逆杉を中心に，太鼓や明笛の音頭に調子を合はして踊って居る。男女の環は，音頭と共に，窄めたり大きくなったりする。その環が擴がったり窄まったりするたびに若い男女のほの白い手が闇の空中に見える。蓋し調子を合はす爲に踊手が一節一節に，兩手を上げて敲くのである。

踊り乍ら男女は又た歌ふ。その歌の原始的なる事，尾音悠揚にして哀調を帶びて居る事に，予は思はず涙を誘はれた。巳凉天氣未寒時の夜，山の奥，男女の亂舞の中に立って，旅から旅へ飄泊へる旅客は，どうしてその哀音慘愴なる鄙歌に，泣かされざるを得ようぞ。

予には堪まらなく盆踊りが好きになった。その原始的な音頭が氣に入った。無邪氣な此の若き男女の，何事をも打忘れた樣子が氣に入った。悲凉激越な鄙歌の歌音も氣に入った。殊にかうした夜の薄黑い森の中の神秘的な頽廢的氣分が氣に入った。詩が三つ出來たのである。

秋夜河燈凈業菴　蘭盆佳話古今談　誰知域外蓬壺島
亦有流風似漢南

桑間陌上月無痕　人影衣香舞斷魂　絶似江南風景地
黄昏細雨賽蘭盆

贈句投瑶事若何　悠悠清唱徹天河　離人又動飄零感
泣下蕭娘一曲歌

その翌翌日，予は雨を冒して東京に歸ったのである。（十・八・三十日）

原载一九二一年十月十五日、十一月十五日、十二月十五日日本《雅声》第三、四、五集

〔译文〕

盐原十日记

首夏犹清和，何故人人赴山赴海？疑云难消的初夏闪过去，多云连续了数日。已是立秋前十八日，梅子雨仍下个不停，使盛夏并无一日暑热。倘若如此，何必去避暑呢，正暗暗自喜时，立秋后二三日，突然袭来了九十三度的高温。

丛竹幽兰叶尽焦，秋来转觉暑难消。卖冰帘下红裙影，映得斜阳似火烧。格外夸张秋来的暑热，无非是对自然鸣不平。自古以来，诗人们在消夏杂咏、消暑词之类诗词中，大抵不直接咏叹天气的暑热，却如此这般搪塞过去，所以虽处盛暑，更不觉热。对于这种虚伪态度，我却象个小孩似的，竟有了反抗之心。

都会的炎热愈益不堪，于是打算逃往盐原，是八月十日。翌十一日午后，在聒耳的蝉声中，一踏上山阴道，郊野的风光便入神不已，我乘坐的汽车驶上了盐谷高原。

绿树参差坠影长，野田初放稻花香。何人解得山居乐，六月清斋午梦凉。顺口读上去，晓得是三五日前一诗人的矫饰，令人

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com